

広報紙紹介

地域の活性化を目的にした 地域だよりの発行

広島県尾道市向島町 立花だよりを作る会



広島県尾道市向島町で、地域だよりを発行して今年で19年目になる「立花だよりを作る会」を紹介します。「たちばな」の立ち上げから長年発行を手掛けて来られた則信隆さんからお話をお伺いしました。

——地域だより「たちばな」の発行は今年で19年目になりますね。どのようなきっかけで始めたのでしょうか。

則信さん 2001年4月、60歳で定年退職し、東京から尾道市の向島町立花にUターン

しました。立花地域は1950年の第1回国勢調査の結果、70歳以上の人口比率が日本中で一番高く、「日本一長寿村」(当時は、村でした)となった処です。41年ぶりに住み始めた故郷は、まるで浦島太郎の心境で、地域のことは全く分からない状況でした。その時、地域情報の必要性を痛感し、「地域だより」の発行を思い立ち、地域の古老(元地区社会福祉協議会々長)に話をした処「君がやるより外ない！」とのお返事。

これをきっかけに、当時の町内会長と副会長（計3名）および地区社会福祉協議会会長および地域の有識者として郵便局長等の賛同を得て、6名の編集委員で3か月毎に「立花だより」の発行を始めました。

——どのように発行していますか。

則信さん 地域の集まりに可能な限り顔を出し取材と写真撮影を行い役員等から情報を入力、3か月毎に事務局でA4用紙4枚程度に粗案を作成してきました。編集は本会のメンバー（編集委員）に作成した粗案を配布し、約1週間後に編集委員会を開催、掲載内容全般について打合せて最終原稿に仕上げてきました。

事務局でパソコンを使ってカラー印刷をした上で、地域の全家庭（約260戸）に町内会役員が配布して、今年で19年目を迎えました。編集委員としては、立花町内会々長および副会長2名、立花地区社会福祉協議会々長、地域の有力者1〜2名に協力を頂きました。

主な掲載記事については、地域の行事計画と活動結果、地域の主要団体役員紹介、転入家族紹介、1歳児および亡くなられた方の紹介、小学校入学生と卒業生の紹介、地域のトピックスの紹介等です。

——紙面を作成する上で工夫していることがあればお聞かせください。

則信さん 見て頂くのことを常に考えるよう心掛けました。対象者は、子どもさんから

高齢者まで幅広い世代年齢の人たちです。共通点は同じ地区に住んでいることのみ。よって、写真と見出しで伝わるように心掛けました。当然ながら、事実の確認、良いことを中心に知らせるよう、心掛けました。

——会報の発行を通じて成果として感じていることは？

則信さん 誌面では「地域へ転入してきた家族の紹介欄があるので、その人たちの趣味を知ることができて交流を図りやすい」という声を聞くことがよくあります。転入者からは知り合いができ、住みやすいところと感想を聞きます。また、1歳児の紹介や他界者のお知らせ欄を見て地域の動向が分かるという声も聞きます。そして、「立花だよりを楽しみにしています」「今までの立花だよりをファイルしています」といった声も頂きました。

発行の半年後に、尾道市社会福祉協議会に当会の活動を認めて頂き、年間2万5千円を18年間、当会に支援して頂きました。また、今までに地域の個人や団体から33件累計32万3050円の寄付がありました。

2018年の西日本豪雨で立花地域から通勤通学等に毎日通る道4本のうち3本が土砂崩れ等で遮断、また地域の上水道が断水、当会でその日のうちに井戸水供給可能者を募り「井戸水供給者マップ」を作成、翌朝に全戸配布しました。その時ほとんどの高齢者、一人

住まいの人も、動揺することなく日常生活を送ることができました。

現在、立花地区の町内会加入率は95%以上を維持しており、町内会最大の年中行事として防災訓練、シテイクリーニング（清掃活動）参加する住民の様子等をみると、地域が活性化していると感じています。

——「立花だよりを作る会」の課題や新しい動きなど教えてください。

則信さん 立花だよりの発行10年目頃から後継者を探していましたが、19年目を迎えたとき、「小生83歳となり、体力的にも無理ができない状況になり、74号をもって発行を閉鎖する」旨の記事を掲載しました。

すると、かねてより立花だよりに関心を持っておられた青木啓介夫妻から「発行を引き継ぎたい」と申し出があり、5月10日発行の第74号に続き、8月10日には第75号が発行され、立花だよりが継続されることになりました。

最近、東日本大震災、能登半島地震の状況を聞くにつけ、また南海トラフ地震の予測等を聞く時に「大災害発生時、地域で3日間程度は支援はないと思って地域で凌いでください。救急車もパトカーも来てくれません」と訓練時に聞いた言葉を思い出します。そして、大災害発生時には地域の助け合いが必須だと思います。

——ありがとうございました。